

中国往生伝の倫理

江 隈 薫

迦才『浄土論』の一章に往生者の列記がなされて以来、中国では数種の往生伝が編纂されたが、これらには余りにも奇跡・奇瑞の記述が多いため伝記史料としてしか活用されていない。

しかしながら編纂者の意図を考えると、単に往生者例を列記して願生思想を鼓吹するだけでなく、自己の理想とする往生者の姿を具体的に示そうとした、という面を無視できない。つまり自己の教理を具現化した往生者像を示そうとしたもの、といえるのである。

こう考えると、編纂者が用いていた種々の理念を往生者の姿勢の上に今一度照らし合わせることができると思う。本稿は唐代の著、迦才『浄土論』と『往生西方浄土瑞応刪伝』（以下『瑞応伝』と略称する）とを取りあげ、何故にそのような往生者を掲げたのか、そのために元になった伝記・説話にどのような書き改めを加えているか、という点を検討し、次いでそのような往生者像を作らせている思想を考察することによつ

て、唐代浄土教について又一つの視点を見出したい。

なお倫理とは「人間のあり方」という意味に用い、それらの往生伝において、「どのような願生者のあり方」が理念とされているか、という面を出家者をも含めて検討したい。

迦才については『浄土論』という著作のある他は何も明確ではないが、今は善導の少し前の時代、長安を中心に活躍した僧ということだけを前提としておきたい。

この著第六章「往生人相貌」は中国最古の往生伝ともいわれ、二〇の往生説話が列記されており、この内、比丘尼三、憂婆塞二話だけは元となつた資料をたどることができる。

比丘尼の三話は梁代五一六年、宝唱の撰集になる『比丘尼伝』に依つているが、注目すべき改変が加えられている。尼法勝について

法勝出家、住寺之後乃往京師。進修禪律該通定慧探索幽隱、訓誘眷族不肅而成。於禪寂中念仏為業、終時蒙仏放光來照而卒。

と迦才は記しているが、『比丘尼伝』においては、

少出家……恭信恪勤衆所知識……（病の友人山氏のため）勝元無著積瞻待医藥皆資乞告……（山氏死後）遊京師進修（以下迦才と同じ）……（勝遇疾）後遙見一仏坐蓮華上光照我身。従以後タ不復眠、令人輒法華。至干後夜氣息稍微、命令止経為我称仏、亦自称仏。将欲平明容貌不改奄忽終焉。

となつており、慈悲行、禪律の修習、訓誘、そして法華読誦と称仏が語られているだけで西方願生はまったくなく、さらに「於禪寂中念仏為業」とは「亦自称仏将欲平明」を承けたものであるが、改変と見なければならぬ。しかし修業過程としては山代看病が略されている他は要約と考えられる。

次に尼光静について迦才は「恒に禪慧を習し、恒に念仏清浄を以て業と為す」としているが『比丘尼伝』では、

少而勵行長而習禪思。不食甘肥将受大戒絶穀餌松……（患疾後）属念兜率心々相続如是不斷……殊香異相満虚空云々。

と大戒を受けるための逸話と兜率願生とが語られている。それを迦才が、禪と念仏に秀でた尼、と書き改めたのである。また尼法盛については改変という程の点は見出せず、道德隆盛で安養を願つたという。

さて憂婆塞の内、阿曇遠と魏世子の話は『冥祥記』を原史料としている。ところで『冥祥記』は梁代の書と伝えられるだけで現存せず、諸書に引用された断片だけを知ることがで

き、迦才の引用と同じ箇所が唐代道世撰（六六八年）『法苑珠林』一五卷「阿弥陀仏感応縁」に収録されており、相互に無関係に『冥祥記』から取り入れたと思われる。この感応縁としては『冥祥記』から四話の他、『梁伝』から三、『唐伝』から三、『西域伝記』から一話収録されており、両僧伝よりの引文はほぼ正確に引用・要約されており、『冥祥記』よりの引文も一応大差はないと考えてよいであろう。

迦才の記述も『法苑珠林』と大きな相違がなく、阿曇遠は奉仏精進して菩薩戒を持ち、懺悔の業に励んで遂に感応を得、臨終時には「宅中芬香云々」であつたと言ひ、魏世子では、一度死んだ娘が蘇えり母親に仏法を勧めたという。

以上の検討から、無理をしても「念仏」がつけ加えられているが、その他の行業過程はそのまま書き写されているといえる。すなはち宝唱・道世の掲げる行業と迦才のそれとがほぼ同じなのであり、禪律とか菩薩戒を持つことと並行して「念仏」が記されているのである。

迦才が新しくつけ加えた往生者を見ておくと、

尼大明月、凡念仏時、先著浄衣口含沉水香殊焼香浄室、念誦三四年間相続不斷。

張元祥 持戒恒誦無量寿觀經念弥陀仏為業……正念於即寿終。
並州老翁 昼夜專念阿弥陀仏、眼不識睡三五年間修念仏業。
温静文婦 二年之内口恒念仏、忽爾罪障消除現見弥陀仏国。

などであり、嚴格で不斷長時の念仏業が語られている。これらに対し十念往生者が一例記されており、

不信因果常以殺鴆為業……見地獄苦……請一師……遂左手燃火右手握香、面向西方至心念仏、未滿十念即告衆云、仏從西來、と臨終時の必死の行業が詳しく語られている。

比丘については兜率上生との比較、別時意説の反駁^②、浄土教先達者の称揚など特定の意図が表面に出ているが、比丘尼と同じく精進練行・念仏見仏・教化・瑞相という記載の型が見出される。

このように見てくると、小豆念仏を含むひたすらな念仏と、時には教化につながる禅律持戒等とを迦才は勧めているのであり、この限り自力的と言うこともできる。しかしそれ以前に中下根者のために次のような往生因を示していることに注意したい。

若就中下之人、要唯有五。一先須懺悔無始以来障道惡業……二須發菩提心……菩提心者略有三種。一斷一切惡心二修一切善心三化度一切衆生心也。三者須專念阿彌陀仏名号……常念仏名有二種益。一由常念故諸惡覺觀畢竟不生、亦得消於業障。二者常念故善根增長、亦得種於見仏因緣。三者常念故勲習熟利臨命終時正念現前也。……

とあり、四に觀察、五に廻向と数えあげているが、菩提心と常念の断惡修善を強調することにより、通仏教的な証果に至

るものとして浄土願生思想を位置づけているといえる。

『瑞応伝』の編者は中唐の大浄土教家少康^③と伝記等すべて不明の文諺の二名であるが、やはり書誌的な疑問が提されておき、現行本のごとくなつたのは五代末の僧道説の刪補によつてであろうといわれている。しかしここでは少康達のグループによつて八世紀末貞元年間にほぼ成立した、として論をすすめることとする。

さて『瑞応伝』には四八の往生話が収録されており、僧が二一名の多きを数え、慧遠・智顗等が加えられ、さらに方等懺を行ずる僧もいて学系を把えることが誠にむずかしい。しかし迦才『浄土論』から一八話も再録されており、これとの比較を手がかりとしたい。

尼法勝について『瑞応伝』には、

進修禅寂念仏為業、訓誘道俗皆勸往生。得病自知不差。臥見一僧、報曰、此病不差須念仏。又見二僧、偏袒執花立在床前。

とあり、迦才よりも短い文になっているとともに、単なる要約ではなく「道俗に往生を勧む」とあるのは改変と見なければならぬ。さらに短文となつたため「念仏」の内容が極めて曖昧になっているのである。

尼法蔵については「禅業高遠」というが『浄土論』にはさらに「道德隆盛常願生安養」と記されてあつたし、阿曇遠

について「持菩薩戒事含禪師修淨土業」というだけで、感応を祈つた努力は省略されている。また張元祥では「持戒」が削られて「日念西方」というだけである。他方尼大明では「三四年相續不斷」と記し、数多念仏についてはほぼそのままといえる。二・三の往生者を見ておくと、

温文靖 念仏口不絶便見仏国。(夫との對話が略されている。)

約山老翁 行道念仏、(齋を作る功德が軽視されている。)

汾陽泉老人、常誦西方……止宿念仏。(眼不識睡とか臨終の様相が省略されている。)

とあり、西方念誦に単純化され一本化されていることが見出される。この点は造悪の往生者によりはつきりと示されている。

汾陽人不得姓、殺牛為業……師日、觀經中說臨終十念尚得往生、仏豈妄言。忽爾異香滿室便終。衆人皆見異香瑞色祥雲。

これは『浄土論』の殺猪者を承けたものであるが必死の臨終行儀はまったく削られている。『瑞応伝』で初めて加えられたものも、

僧雄俊……善講說無戒行所得施利非法而用。又還俗入軍營殺戮

……俊雖造罪不作五逆。若論念仏不知其数……、

僧法智……住在天台念仏為業、性多龜率不抱律儀……昼夜念仏

……金色光明照數百里、野雉驚鳴、江上船人謂言天曉。

と称名の絶対性が語られており、さらに往生者の九品階位を

うかがわせる記述はまったく見出せない。

これらの往生因は称名に止まっているが、他の往生者についても念誦以外の行業は決して勧められておらず、迦才もついていた断悪修善性とか、より高次な修業に通じる面は見出すことができない¹⁾。この傾向は易行化というだけでなく、「讃仏」ともいえる別箇な倫理によつていると考えられる。

1 佐藤俊夫氏『倫理学』

2 大正蔵 四七卷、九七頁以下。往生伝の書誌については小笠原宜秀氏の研究がある。(『中国浄土教家の研究』九九頁以下)

3 大正蔵 五〇卷、法盛は九三七頁下、法勝は九三八頁下、光

静は九三九頁中、なお名畑応順氏『迦才浄土論の研究』一四六頁

4 大正蔵 五三卷 四〇〇頁以下。小笠原氏前掲著、一〇五頁

を参照されたい。

5 大正蔵 五〇卷、釈僧亮は四一一頁上、釈法悦・禪師道度は四一二頁中。

6 大正蔵 五〇卷、釈慧海は五一五頁下、釈道昂は五八八頁上、釈善胃は五一九頁上。

7 この相貌章には論理的な面はまったくなく、夢中で仏の承認を得るというだけに終始させている。

8 大正蔵 四七卷、八九頁以下。

9 塚本善隆氏『唐中期の浄土教』三一七頁以下。

10 大正蔵 五一卷、一〇四頁以下。名畑氏前掲著、一七九頁以下を参照されたい。

11 藤原凌雪氏『念仏思想の研究』